

# 悪魔♂ に転生す

上田ながの  
挿絵:あけるなる

# ムツツリ 女騎士



試し読み版

序章	聖騎士の死	006
一章	ちんぼのある身体	017
二章	女騎士、童貞を捨てる	053
三章	悪魔大元帥という少女	099
四章	悪魔大元帥の純潔	121
五章	魔王	160
六章	和睦	199
終章	幸せを必ず守ると誓いながら……	232

# 登場人物紹介

## ルーシェニ ロード＝デモニア

魔界を支配する魔王。外見は愛らしい幼女だが、他の魔族とは一線を画す強大な力の持ち主。

## カナリア＝ ファルム＝ロギア

ロギア王国の王女。ステーションの主人であり、幼馴染みでもある慧眼な美姫。

## ヴィーネ

ロギア王国侵攻軍の指揮を執る悪魔大元帥。千里眼の力を持つ冷徹な銀髪美少女。

## オーアス

平和主義のおっとりとした魔族少女。占いや魔術を得意としていて人の生死すら操る。

## ステーション＝シャルロシア

ロギア王国を護る女騎士団長。生真面目な美人でカナリアを何よりも大切に思っている。

## 序章 聖騎士の死

「行かないでステーシアッ!!」

引き留められた。泣きそうな——いや、泣き声で、行かないでくれ——と。

その声にステーシアⅡシャルロシアは足を止める。本来ならば気にせずに行かなければならない。それは分かっているのだが、立ち止まらずにはいられなかった。

「お願いよステーシア。お願いだから行かないで……」

背後から抱き締められる。ギョツと強く。

「……姫様すみません」

ステーシアは一言だけ謝罪の言葉を口にした。姫——ロギア王国第一王女カナリアⅡファルムⅡロギアに、万感の思いを向ける。

「なんで？ 勝ち目なんかかないのよ。それなのにどうして？ ただ……ただ死に行く様なものじゃないっ!!」

カナリアの瞳からは大粒の涙が零れる。

涙を流すその顔は、恐怖の色に染まっていた。

ステーシアを失うことに対する恐怖の色だ。

そう思う気持ちはステーシアにも分かる。状況が絶望的というのは事実だった。

現在、ロギア王国王都ロギナスカは魔王軍による包囲を受けている。王都に入ることばもちろん、出ることも不可能という状況にあった。これでは援軍を呼ぶための使者を出すこともできはしない。いや、時間さえあれば別の都市、別の国が現状に気付き、軍を派遣してくれはするだろう。が、それだけの時間、魔王軍の猛攻に耐えきる程の力はロギナスカにはなかった。

(いや、違うな。実際にはある。敵は王都を急襲するために王都を包囲するために必要最低限の戦力しか送ってきてはいないから……。だから、本来ならばロギナスカの防衛部隊だけでも対処は可能だ)

そう、可能はずだった。

奴が——悪魔アスタロトさえいなければ……。

悪魔アスタロト——魔王軍において魔王に次ぐ、いや、下手をすれば魔王に勝るとも劣らないと言われる程の力を持った魔族だ。その力はたった一人で万の軍勢に匹敵する程である。そのアスタロトが王都急襲部隊の指揮官だった。

アスタロトの存在はまさに絶望そのものだった。

奴がいる以上勝ち目はない。それがカナリアが恐怖している理由だった。

実際ステーシア自身も、アスタロトが来ている以上勝ち目は薄いと思っている。人の力が及ぶ様な存在ではないのだ。

だが、しかし、絶対に諦めるわけにはいかない。

何故ならば、騎士だから。この国を、カナリアを守る騎士だからだ。

「……勝ち目がない？ その様なことをいつてはなりません姫様。まだ、決まったわけはありませんから。勝つための策はあります」

最期まで足掻く。抵抗する。たとえ希望は僅かでも、必ず掴んでみせる。

そのための方策は既に練ってある。

「策って……何をやる気？」

それは――

「……単純なことです。アスタロト……奴を倒す」

そう、アスタロトの排除だ。奴さえ倒すことができれば、魔王軍は戦力的な理由から撤退せざるを得ない。奴らが包囲を続けていられるのはアスタロト一人に依存しているからに過ぎないのだから。

「アスタロトを倒す？ そんなこと……どうやって？」

「簡単なことです。私には聖剣がありますから。我がシャルロシア家に代々伝わる聖剣ラグナブレイドが……」

「聖剣ラグナブレイド……。でも、それを使うってことは……」

「……分かっています」

頷いてみせる。

分かっている。聖剣を使うということの意味をステーシアは誰よりも理解していた。

聖剣ラグナブレイド——使用者の身体能力を限界まで、いや、限界以上に引き出すことができる剣だ。それこそ魔族を超え、神の領域に至れる程の力を与えてくれると伝えられている。ただし、神にも届く多い程の奇跡を無条件に得ることはできない。当然代償がある。その代償とは、即ち使用者の命とラグナブレイドそのものだ。奇跡を発動させれば使用者は死ぬ。そして、ラグナブレイドも永遠に失われる。

「いや……イヤよ。私はイヤっ！ ステージアが死ぬなんてイヤよ!!」

悲痛な声を漏らしながら、ステージアの背中でカナリアはその身体を震わせた。

「私だって死にたくなんかありません」

「だったら」

「……でも、それでも」

そこで一旦言葉を切ると、ステージアは金色の髪を揺らしつつ、振り返った。

背後に立つ黒髪の王女、カナリアを碧い宝石の様な瞳で見つめる。

「私は聖剣を使います」

「何故？ どうして!？」

「理由？ そんなの決まっています」

うっすらと微笑んだ。同時に手を伸ばし、丸みを帯びたカナリアの瞳から零れ落ちる涙を拭う。

「自分が命を落とすことよりも、この国がなくなってしまうことの方が、姫様を失うこと

の方が、よっぽど恐ろしいからですよ。だから、私は使います。姫様がなんといおうと聖剣を……。そしてこの国を救ってみせます」

「すてー……しあ……」

カナリアの瞳からは更に涙が流れた。

悲しそうな顔、見ているだけで胸が潰れそうになる。同時にこれ程までに自分を案じてくれているカナリアに対する愛おしさが膨れ上がってきた。

その想いに逆らうことなどできない。ステーシアはギュッとカナリアの身体を抱き締め、強く、強く……。

「姫様……いえ、カナリア」

王族を呼び捨てにするなど不敬なことこの上ない。騎士としてあってはならないことだが、敢えて名前で呼ぶ。十数年前、まだ幼かった頃の様に……。

「私は必ず貴女を守る。初めて貴女と会った日に誓った通り……騎士として必ず貴女を守る。だから……」

一度言葉を切ると、そっと抱き締めていたカナリアの身体を離し、真っ直ぐ王女の瞳を見つめた。

「後のことは頼んだぞ。どうかこの国を、民を……守ってくれ。次はカナリアが」

「ステーシア……お……お姉ちゃん」

初めてステーシアがカナリアと会ったのはまだ五つの頃だった。その頃のカナリアは三

歳。本当に子供だった。あの頃、まだ立場をわきま弁える前は、ずっとカナリアはステーションのことをお姉ちゃんと呼んでくれていた。

そのときのことを思い出す。無邪気だったあの頃のことを。

あの頃、ステーションが騎士としての訓練に向かう際、いつもカナリアは寂しそうな顔で「お姉ちゃん行かないで」と引き留めてきた。

そんな彼女に対しステーションはいつも――

「行ってくる。カナリア」

そういつて笑った。

だからステーションはとびきりの笑顔で笑う。

でも、その後に続けていた言葉を口にすることはできなかった。

『すぐ戻るから、それまで待っていてくれ』

……という言葉。

「……いつて……いつてよ」

カナリアもそれに気付いている。だから更に縋ってこようとす。

「あの頃みたいに戻ってくるって、待っていて……いつてよ」

その願いに応えたい。

でも、答えることはできない。

「……カナリア……さよなら」



「……えつと……その……これで……いいですか？」

ぐったりとするステーションアを肉棒を挿んだまま上目遣いでオリアスは見つめてくる。

この問いかけに対し、最初は「ああ」と頷こうと思った。だが、どうしてだろうか？

精液に塗れたオリアスの顔を見ていると、それだけで何故か全身を包み込んでいた気怠さが消えていく。気持ち良くて満足することができた——という思いが萎んでいく。

代わりに感じたものは欲望だった。

まだ足りない。この程度で満足なんかできない。もっともっと気持ち良くなりたい——という欲望。

それを証明する様に、乳房に挟まれたままの肉棒がより肥大化を始める。萎えるどころか更に大きく、硬く。

「え？ 嘘……そんな……」

ペニスの変化に当然オリアスも気がついた。

「なんで大きく？ 男の人って一度出せば満足するんじゃない？」

「確かに……男は一度出せば満足し、しばらくそういう気にならない——と私も聞いたことがある。だが、この身体は……別な様だ。実際私はまだ、満足できない。だから、すまないが続けてもらおうか」

もっと射精したい。もっと心地良くなりたい——わき上がる欲望に逆らうことなく、オリアスに行為の続行を命じる。

「できないとはいわせないぞ」

拒絶は許さない。

「わ……分かりました……」

一瞬泣き出しそうな表情を浮かべつつも、オリーアスは頷いてくれた。

「いい子だ。それでは……そのまま胸を上下に動かすんだ。私のちんぽを胸を使って扱いてくれ」

「……えっと……こ、こうですか？」

戸惑いつつもオリーアスは素直に従ってくれる。

「んっふ……ふっふっ……くっふ……んふううっ……」

鼻から息を漏らしつつ、乳房全体を使って肉棒を根元から先端まで幾度となく扱いてくれた。

「いいぞ。だが……もつとだ。もつと強くペニスを挟んでくれ」

「もつと強く……。こ、こうですか？ こんな感じで……いいですか？」

躊躇いつつも指示に従ってくれる。両手で強く乳房を押さえ込むことで、肉槍をこれまでに以上の力で圧迫してくれた。

「ふうう……これ……ビクッビクッて震えが伝わってきます。あうう……なんか……気持ち悪い……でも……だけど……頑張らなくちゃ……」

戦争を終わらせたいという想いは本物らしい。ペニスに対して怯える様な素振りを見せ

つつも、決して乳奉仕をやめようとはしない。それどころか、これまで以上に激しく肉棒を乳房で扱き上げてくれた。

ぐっじゅ……ぬじゅっ！　ぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅっ！

精液で濡れているせいか、淫猥な水音が響く。

「はあ……はあ……はあ……この音……凄くエッチ……」

顔を真っ赤にしながらいりアスは呆然と呟く。そんな姿もまた可愛らしく、より興奮が膨れ上がってくるのを感じた。

「んっふ……ふうっふうっ……くふううう……」

どんどん荒くなっていくステーキシアの吐息。それに比例する様に、射精感がわき上がってくる。根元から肉先に向かって熱いものがこみ上げてくる。亀頭が膨れ上がっていく。

「これ……大きくなってる……。ステーキシアさんの……お……おちんちんが……胸の中で大きく……熱くなってるのが……分かります」

「そうか……それは……くうう！　私を感じている証拠だ……うっは……くふうう」

素直に快感を伝える。

「感じている証拠……。それじゃあ、また射精を？」

乳房でギュッと強く肉茎を圧迫しつつ、精液に塗れた顔で尋ねてくる。

「くうっ！　ああ……そうだ。また射精しそうだ……」

躊躇うことなく頷いた。

「……だが、これでは駄目だ」

しかし、そのままでは終わらない。

確かに自分は射精しそうだ。我慢などしたくない。すぐにでも撃ち放ちたい。

しかし、このまま出たくはなかった。

もっともっと強い快感が欲しい。更なる愉悅の中で射精したい——気持ち良さに比例する様に、更に強い欲望が膨れ上がってきていたから……。

「駄目って？ それじゃあ……私は何をすれば？」

「簡単なことだ。啞えろ」

「啞える？」

意味が分からないといった様子でオリーアスは首を傾げる。

そんな彼女に対し「胸の谷間からちんぼの先端が顔を出しているだろ。それを口で啞えろ」といつているんだ」と重ねて命じた。

「え？ そんなこと……」

「できるな？ お前に選択肢はないぞ」

拒絶は許さない。

ジッとオリーアスを見つめる。

この視線に、命令に、オリーアスはしばらく固まった後、やがて観念した様に「はい。啞えます」と頷いてくれた。

いや、頷くだけじゃない。肉茎を乳房で挟み込みつつ、谷間から顔を覗かせる亀頭に唇を寄せてくれる。接近に伴って肉先に吹きかかる「はあ……はあ……はあ……はあ……」という吐息がこそばゆく、心地良かった。この吐息だけでも出してしまいたい。それ程の快感を覚えているステーションシアへ「これでいいのですよね？」と問いかける様な上目遣いに向けてきつつ、オリーアスは艶やかな唇を開くと――

「はっむ……んむうううっ」

肉棒を啜えてくれた。

「くおっ！ うっあ！ くあああああっ！」

温かな口腔に亀頭が沈んでいく。カリ首を口唇で上下から挟み込まれると、それだけで一瞬視界が白く染まった。思わず腰をビクンツと跳ね上げてしまう。

「もっぶ！ おむうううっ!？」

腰が上がったことでより喉奥まで肉棒が挿し込まれる。唐突な出来事にオリーアスはどこか辛そうに瞳を見開いた。苦しいのか、眦には涙まで浮かべる。少しばかり痛々しい姿だ。けれどどうしてだろう？ その痛々しさに興奮が募る。もつと蹂躪してやりたいと思ってしまう。そうした欲望に抗うことなどできはしない。

「我慢できん。い……行くぞっ！」

わき上がる本能のままに一言告げると、ステーションシアは躊躇うことなく腰を振り始めた。ただ受け身でいるだけでは物足りない。オリーアスのすべてを貪り尽くしたい！ 強い欲



唇で肉胴を擦り上げてくれる。ポロポロと涙を零しながらも、舌を蠢かして肉先を舐め回してくれた。

「ふっちゅ……むちゅる……んじゅっ！　じゅっじゅっ……ちゅずるるるう」

頬を窄めて肉槍を吸ったりもしてくれる。精液を吸い出そうとするかの様な動き。そうした奉仕ははつきりいつてぎこちないものだった。それでも腰が抜けそうなくらいの性感が走る。強烈な性感に「ふわああああ」とステーションアも悲鳴を上げることとなった。

「お……おおきくなつてりゅ……くひのなかれ……おひんひんが……」  
性感に比例する様にペニスが肥大化する。

「これ……出る。出るぞ！　ああ……出る！　くうう！　も、もう少しの我慢だ！　あと少し……くううう！　あと少しで出る！　だから……もう少しだけ耐えろ！」

肉棒を吸われるたび、昂りが大きくなっていく。肉先を口腔粘膜に押しつけ、口唇でカリ首を擦られると、肉悦が肥大化していく。思考まで吹き飛んでしまいそうな程の心地良さだった。こんな快感を途中で中断などできるはずがない。止まれるわけがない。だから奉仕に合わせて腰を振る。女悪魔の口腔と胸をひたすら堪能した。

女悪魔の口端から唾液が垂れ流れる。胸の谷間からは先走り汁や先程の精液、それにオリアスの汗が混ざり合った汁がビュッビュッとピストンのたびに飛び散った。

「出る！　ああ……オリアス！　出るぞ！　また……射精るっ！！　だから、吸え！　激しく……吸ってくれええ！」



「おおおとおっ！」

抑えられない。更なる渴望を……。

ぶっびゅっ！ どびゆるっ！ ぶっびゆるるるうっ！

我慢できるわけがなかった。更に流し込む。より多量の精液を……。

「ぼっぼっぼっ——んもおおおとおっ！」

その量は凄まじく、ブクツとオリーアスの頬が内側から膨らむくらいだった。

「はあ……はあ……はあ……さ、最高だったぞ」

そこまで撃ち放ち、ようやく満足する。幾度となく肩で息をしながら、ズボツとオリーアスの口腔からペニスを引き抜いた。

「ぶっふ！ んぶうううっ！」

慌ててオリーアスは口を閉じる。多分、精液を吐き出しそうになってしまったのだろう。頬を膨らませ、どこか苦しそうな表情を浮かべたまま、どうしていいか分からないといった様子で、縋る様な視線をこちらへと向けてくる。

その姿を見てみると、またしても欲望がわき上がってきた。

「良く吐き出さなかったな。それじゃあ……そうだな……それを……全部飲んでくれ」

躊躇うことなくそれを口にし、命じる。

対する女悪魔は最早逆らうことはできないと悟っているのか、僅かにコクツと首を縦に振ったかと思うと——

「んっぎゅ……んぎゅっ！ んっんっんっ……んぐううっ」

精飲を開始した。

ゴクツゴクツと細い首を上下させ、白濁液を飲み干していく。

「んげっほ！ げほっげほっ……んっは……んぐううっ……んぎゅっ……んんんん！」

途中、精液が濃厚すぎたせいか、幾度となくオリーアスは咳き込んだ。それでも精飲を中断しはしない。最後の一滴まで、ステーションの前で嘔下<sup>えんげ</sup>してくれた。

「よし、それでは口の中を見せろ。しっかりと飲み干したことを私に見せるんだ」

口内がどうなっているのかを見たい。確認したい。

「んっは……はふああああ……はあっはあっはあっ……けぷっ……あはああ……の、飲み干し……ましたああ……」

欲望のままの命に従い、オリーアスは口内を見せてくれた。

小さな口の中——幾本も白濁液の糸が伸びている。唾液と混ざり合った精液の残滓<sup>ざんし</sup>や、吐き出す吐息が精液臭いところが実に生々しかった。

口端からは咳き込んだときに零れた精液が垂れている。顔中牡汁でグチャグチャという有様だ。可愛らしい顔が台無しである。

けれど、そんなところが実に魅力的で、興奮を誘われた。

(駄目だ。抑えられない)

既に三度も射精している。が、身体は昂り続けていた。興奮は萎むどころかより大きく





眉間に皺を寄せる。かなりイヤそうな顔だ。

「それなら別に飲むまではしなくても……」

(いや、確かに嬉しくて興奮はしたが……)

反射的に気遣う様な言葉を向ける。

「……そんなの駄目よ。私は……これを飲まなくちゃいけなかったの……」

よく分からぬ返事だった。

「飲まなくちゃいけない？　なんで？」

「……だって……オリーアスは飲んでたでしょ？」

「そ……それは……確かに……。って、そこまで見てたのか？」

「……あんた達がしてたことは最初から最後まで見てたわよ」

「最初から最後までって……なんでまた？」

「なんでって、そんなのアンタのことが気になってたからで——って、な、何をいわせるのよ！　この馬鹿っ!!」

恥ずかしそうな表情を浮かべながらこちらを罵倒してくる。

(こいつ……本当にアスタロトのことが好きだったんだな……)

改めてヴィーネの想いを理解した。同時に少し胸が痛くなる。その想いはアスタロトによつて意図的に作られたものだから……。

「何よ？　何か言いたいわけ？」



「いや……別に何も……」

「そう？ だったら……続きをするわよ」

「つ……続き？ えっと……私はもう射精したが……」

「何いつてるのよ。アンタのこれ……まだまだ全然元気じゃない」

ペニスを指差してくる。実際ペニスはまだまだ元気だった。

（いや……でも、この想いに流されていいのか？ アスタロトの策略をそのまま利用している様な気がして正直なんというか……罪悪感が……）

『何を言っているんだ私よ！』

声が聞こえた。

（その声……もう一人の私か？）

『そうだ……。いいか、私よ。無駄に気など遣うな。その方が可哀想だぞ。好きな男に拒絶される……。女としてこれほど辛いことはないはずだ。男よりも女という性癖だったとはいえ、私だって女なんだからその気持ちは分かるだろ！』

（それはまあ……。でも、騙して抱くつてのは……）

『騙す？ 違うな！ これはヴィーネを救うための行為だ！ いいか、ヴィーネは騙されてアスタロトへの想いを抱いた。その想いを私が叶えてやるんだよ！ ヴィーネの想いに応えてやり、ヴィーネを大切にする！ そうすることでヴィーネは救われるのだ！』

（……なるほど。確かに納得できる、いや、だが……その場合オリーアスはどうなる？

私はオリーアスに責任を取るといつてしまったぞ)

『責任は取ればいいじゃないか！ 王族や貴族は皆側室を持っている。自分の女——そのすべてを幸せにするというのも男の——騎士の甲斐性だ！』

(……それは……そ、その通りだな！)

自分が好きだった本は陵辱ものだけではない。いわゆるハーレムものというのも大好物だった。

(ヴィーネのために!! 私はやる! ヴィーネとドログチャになるまでセックスを!)

ギランツと瞳に欲望の炎を灯す。

「……アンタ、なんか変なこと考えてない?」

結果、ヴィーネにも何となく察されてしまった。

「へ? あ……いや……その……それは……」

そのせいか、ヘタレてしまう。我ながら実に——

「……情けないわねえ」

「ぐ……返す言葉もない」

「別にいいわよ。なんにせよ、あんた……ヤル気になったってことでしょ? こっちも凄く大きくなってる。口でする前よりも……」

肉棒に触れてくる。確かにペニスパンパンだった。いつ破裂してもおかしくないレベルである。正直触られただけでも射精してしまいそうな程であり、思わず「くおっ」と声

を漏らしてしまった。

そんなステーションアを嬉しそうに見つめつつ、ヴィーネは自分のショーツに手をかけると、一瞬躊躇う様な素振りを見せた後、それを脱ぎ捨てた。

秘部が露わになる。秘裂は既に左右に開いていた。覗き見えるピンク色の肉襞は、愛液に塗れている。トロツと太股を牝汁が垂れ流れ落ちていく様が実に淫らで淫靡だった。

陰毛はどちらかという薄い。秘部の形も何となく幼さを感じさせるものだった。だが、そういうところが魅力的で、思わず見惚れてしまう。

「ちよっ！ あ、あんまりジロジロ見るんじゃないわよ……へへへ、変態っ!!」

「あ……その……すまん……」

「だ、だから謝る必要なんかないわよ。だってその……これから……するんだから」  
羞恥の色に表情を染めながらも、改めて肉棒へと視線を向けてきた。

「い……いくわよ」

一言口にし、悪魔大元帥はこちらの身体を跨ぐ様な体勢を取る。下から見上げるヴィーネの肢体。下乳の膨らみにより興奮が煽られるのを感じた。

「えっと……この体勢ってことは……お前の方からしてくれるのか？」

いわゆる騎乗位という奴だ。正直ドキドキする。可愛い女の子に跨がってもらい、腰を振ってもらおうというのは昔からの夢だったから……。自然と表情がだらしなく蕩ける。

「なんかその顔……ヤラシイわね」

「ふえ？ あ……その……それは……」

「ド変態」

「うぐっ！」

厳しい言葉だ。胸に突き刺さる。しかし、何故だろう？ ちよつと嬉しい。

「……変態っていつてるのに嬉しそうなんだけど……って、まあいいか。その……その通りよ。私がしてあげる。だってアンタ、一応病み上がりなわけだし。だから……ありがたく私のその……は……初めて……受け取りなさい」

そんな言葉と共に、ヴィーネは肉棒を手にとって先端部の位置を調整すると、一度大きく息を吸い、腰を下ろしてきた。

「ずっじゅ！ ぐじゅううっ！」

「んっは……はふうううっ！」

挿入が始まる。膣口を押し開き、ズブズブとヴィーネの中へと肉棒が挿入っていく。

「うあああっ！」

先端が挿入っただけでしかない。だが、強い快感に思わず声を漏らしてしまう。ギユツと亀頭を締めつけられる刺激。心地いい。全身が弛緩してしまいそうだ。

「その顔……気持ち良さそうね。でも……まだよ。まだ挿入る！ ほら、まだ……んんん！ まだまだあああっ！」

更に腰が落とされる。肉先だけじゃない。肉茎も半分ほど呑み込まれた。

途端に壁が絡みついてくる。一枚一枚をそれぞれが別の生き物の様にうねらせながら、肉槍をぎゅううつと搾る様に締めつけてきた。強烈な愉悅に視界が明滅する。いつ達してしまってもおかしくない快感。ビクンビクンと肢体が自然と震えた。

ヴィーネは眉間に皺を寄せ、悶えるこちらの姿を見つめながらより腰を落としてくる。ズブズブと呑み込まれ続ける肉槍。遂には腔中で肉先が何かに触れた。

「これって……」

すぐに肉先に触れているものが何かを察する。

「ええ、そうよ……。はあ……。はあ……。はあ……。アンタが触ってるのが……。私が初めてだつていう証よ」

つまり処女膜、ヴィーネが純潔である証。

破りたい。これを破ってヴィーネを自分のものにした。

「……本当にいいのか？」

膨れ上がる欲望を必死に抑え込み、最後の理性を振り絞って尋ねる。

「もちろんよ。女に二言はないわ。それに——」

「それに？」

一体どんな言葉が続けるつもりなのだろうか？ 問い返す。

対するヴィーネはこの質問にっこりと笑うと——

「……アンタのことが好きだからよ」

そんな一言を口にすると共に、一気に肉棒を根元まで蜜壺で啜え込んでくれた。

ブヂッ！ ブヂブヂブヂイイッ！！

「はっぎ！ んぎいいいいっ！」

何かを引き裂く様な音が聞こえた気がした。同時に結合部からは破瓜の血が溢れ出す。ヴィーネは苦しそうに表情を歪めつつ、痛々しい悲鳴を漏らした。

「だ、大丈夫か？」

「んっく……はああああ……だ、大丈夫よ」

苦しそうではあるがヴィーネは笑う。

「確かにその……なんというか……これ……思った以上に痛いわ。お腹……ギチギチ……。膣中、凄く広げられてる……。なんか、息まで詰まっちゃいそう……」

実際膣口は今にも裂けそうなまでに押し広げられている。痛々しさを感ずるレベルだ。

「でも……痛いけど……んっく……あああ……それ以上になんていうか……う、嬉しいから……」

肩で息をしながら、全身を汗で濡らしながら、本当に嬉しそうに悪魔大元帥は瞳を細める。

「ようやくアンタと一つになれたから……」

表情を見れば分かる。心の底からの思いだということが……。

「ヴィーネっ！！」

胸が高鳴った。愛おしさの様なものが溢れ出す。反射的に自分に跨がるヴィーネの身体を抱き寄せた。

「ちよっ!!」

流石に驚きの声を上げる。が、気にすることなく彼女をより強く抱き締めると、その唇にキスをした。

「——んんんっ!!」

まさか口付けされるとは思ってもみなかったのか、ヴィーネは驚きの声を上げ、身をくねらせる。

「……んっは……はああああ……い、イヤだったか？」

一旦唇を離すと、真っ直ぐ見つめた。

「イヤって……そんなことはないけど、いきなりだったから……」

恥ずかしそうにこちらから視線を逸らす。その様な素振りも可愛らしい。

「そうか……それじゃあ、いきなりじゃなければいいのか？」

「それは……その……まあ……う……うん……」

コクツと頷いてくれる。

「なら、もう一度キスをして構わないか？」

改めて問いかける。これにヴィーネは「ストレートすぎて恥ずかしいわよ」とブツブツ  
呟きつつ、こちらを見つめてきたかと思うと——

「んっちゅ……むちゅうっ」

今度は自分からキスをしてくれた。

「んっふ……これが答えよ」

一度唇を離してニッコリ微笑んでくる。その姿により愛おしさが募るのを感じた。この感情に逆らうことなどできるはずがない。

「ヴァーネツ!!」

彼女の頭を引き寄せ、もう一度キスをする。それも一回だけじゃない。チュッチュッチュッチュツと幾度も幾度も啄む様にキスをした。その上で口腔に舌を挿し込む。ただ口唇を重ねるだけでは我慢できないという様に、ヴァーネの口内を舌先でかき混ぜ始める。

「んっふ……むちゅっ！ ちゅっろ……ふちゅろっ！ くっちゅ……んちゅうっ！ ちゅっちゅっちゅっ……ちゅれろおおっ！」

口付けにヴァーネも応えてくれる。自ら舌に舌を絡めてきた。グチュグチュという卑猥な音色が響くことも厭わず、舌を淫らにくねらせてくれる。頬を窄めたかと思うと、じゅるじゅると唾液を吸ったりもしてくれた。

身体を密着させながらの口付け。性器だけじゃない。全身で繋がりが合っているかの様な気がするまでに濃厚な接触だった。自分のすべてがヴァーネと溶け、混ざり合っていく様な気がする。身体中が燃え上がりそうな程に熱くなっていくのを感じた。興奮が高まる。肉棒がより肥大化していく。

「んっちゆる……はああああ……これ、大きくなってる。私の膣中で……んっは……あふううっ！ あ……アンタのおちんちんが……んっく……はああああ……硬くなってるのがわ……分かるわ……。んっく……はああああ……はあ……はあ……はあ……。これ、動きたいってこと？ 私の膣中を……んんっ……か、かき混ぜたいってこと？」  
肉棒の変化にヴィーネも気付く。

「あ……ああ……。動きたい。かき混ぜたい。でも……まだ……」  
痛みがあるだろうから激しい動きをするわけには……。

「大丈夫よ。私は大丈夫……。確かにちよつとは痛いけど、でも、それ以上に……んっく……あんっ……う、嬉しいし、アンタと一つになってるって考えるだけで……き……気持ちがいいから……。だから……その……こ、こんなことだっしてあげられるんだから……」

そんな囁きを向けてくると共に、ヴィーネはゆつくりと動き始めた。

「んっは……あふああああつ！ ふっく……んくううっ！ んっんっ……ふううっ」  
腰を上下させてくる。蜜壺全体を使って肉棒を上下に扱き始めた。

「うあつ！ これ……や、やばいっ！ 凄いで……ああ……き、気持ちいい」

ほんの少し動かれただけでしかない。けれど、ヒダヒダで肉茎を擦られ、カリ首を締められ、亀頭に子宮口でキスをされると、一瞬で達しそうな程の愉悦を覚えてしまう。

「んんん！ ほ、本当に気持ち良さそうね。少し動いただけで……あつは……くはあああ

……アンタのおちんちん……凄く震え始めた。ビクビクッて……あふう……け、痙攣が……伝わってくる。私の身体に……あつふあ……くひんんっ……はあ……はあ……これ、出しそうなの？ もしかして……もう出そうなの？」

肉棒が痙攣する意味にすぐにヴィーネは気付いてくれた。

「あ……ああ……。出そうだ。ヴィーネの膣中に射精してしまっそうだ」

隠す必要などないので素直に絶頂感を認める。

「そう……なら……遠慮する必要はないわ。構わず出して。私の膣中に……」

「いや、でも……それは駄目だ！」

素直に頷くわけにはいかない。

「な、なんで？ 私の膣中には出したくないって……こ、ことなの？」

悲しそうな表情をヴィーネは浮かべる。

「いや。違う。そうじゃない」

「それじゃあどうして？」

「一人だけでイクたくはないということだ。だから……」

女の絶頂感はよく知っている。すべてが溶ける様な、すべてが満たされる様な、幸福感を伴った絶頂。それが女がイクということだ。そんな気持ちを自分とのセックスで味わって欲しい。だからこそ一人でイクわけにはいかない。

「達するときは一緒だぞ」

ヴィーネに対して微笑んでみせる。そのままもう一度ヴィーネの唇にキスをした。それと共にヴィーネの動きに合わせる様にステーションシア自身もピストン運動を始める。指を自分の膣に入れて自慰をしたとき、どんな動きをすれば感じたのか、気持ち良かったのかを思い出す。ただ漫然と膣奥を突くだけでは終わらない。時には浅い部分を擦り上げ、時には膣の上側を激しくカリ首で削る様に刺激したりした。

「んっくあ！ あっは……んふうううっ！ あっあっ！ これ……んひんん！ アスタロト……はっちゅ……んちゅうっ！ はっちゅあ……ふちゅううっ……なんか……痛みが……ああ……消えていく。ちゅっろ……むちゅろおお！ 膣中……おちんちんでかき混ぜられると……んふううう！ き、気持ち良く……なっっていくう」

ステーションシアの責めにヴィーネは過敏に反応してくれる。腰の動きに合わせて心地良さをうに表情を蕩かせながら、明らかに愉悦の色を含んだ嬌声を奏でてくれた。脳髓にまで染み込んでくる様な淫猥な喘ぎ声。その声だけでより興奮が煽られてしまう。膨れ上がる劣情。抑え込むことなどできはしない。

「確かに気持ち良さそうだ。さっきまでよりもヴィーネの膣中……きつく私のものを締めつけてくる。うああ！ これ……我慢できそうにない。すぐにでも射精でてしまいたいそうだ」  
引き千切られてしまうのではないかとさえ思える程の締めつけ、これ以上抗うことなどできそうにない。

「そ……う……。それなら……え、遠慮しないで！ これ……んっは……はふあああ！





「当たり前じゃ。余は魔王。魔王ルーシエじゃ！ じゃから……教えよ。余に……セツクスを教えるのじゃ」

命を下してきた。

本能に——魂まで届く言葉……。抗うことなどできない命令。

「分かりました。では……もつと腰を突き上げて下さい。私にグシヨグシヨになったま〇こを見せて下さい。さあ、早く……」

命に従い、魔王に命を下す。

これに魔王ルーシエは——

「こ、こうか？」

素直に応じる。見た目通りの子供の様な無邪気さで腰を突き上げると、多分本能的にだろろうが足を左右に開くなどということまでしてくれた。

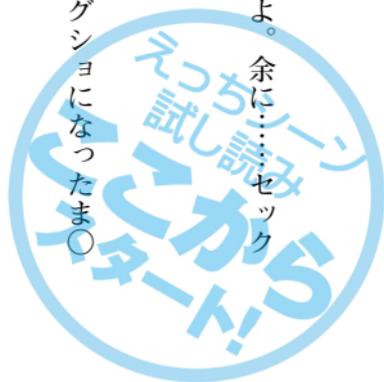
当然の様に肉花卉が更に開く。

クパアツと行為を始めるまでは閉じていた狭い膣口が口を開けた。トロトロと愛液を垂れ流す。呼吸に合わせてクパツクパツと開閉を繰り返すその有様は、早く挿入れて欲しい。犯して欲しいと全身で訴えてきている様にも見えるものだった。

「はい……では、始めますよ」

止まることなどできない。躊躇いなどあり得ない。

膝立ち状態になると共に、肉棒の先端部をグジュツと魔王の膣口に添える。



「はっひ！ んひいっ♡」

ただ触れただけでしかない。だが、それだけで秘部からビュッビュッとまたしても愛液が溢れ出した。

「……もしかして今……イキましたか？」

思わず尋ねる。

「あ……あはああ……イッた。今……イッたああ♡」

するとルーシエは素直に首を縦に振り、絶頂を認めた。

「触れただけ……でも……なんか……これ……えつと……」

ペニスをなんと呼称すべきか？ 迷う様な素振りを見せる。

「……ちんぽとって下さい」

「ち……ちんぽ？ 分かった……。この……ちんぽ……熱いのが気持ち良くて……余は……我慢できなかつた。イッて……しまった」

散々愛撫し続けた結果、どうやら魔王の肉体は想像以上に過敏になっているらしい。太股を垂れ流れ落ちる程の愛液を分泌させつつ「イッた。余は……まや……イッたああ♡」幾度もイッたイッたと繰り返し返してくれた。

「そうですか。でも、この程度で満足しないで下さいよ。もっとです。もっと強い快感を刻んであげますから」

更に欲望が刺激される。犯したい。滅茶苦茶にしたい——わき上がる想いを抑えること

などできるはずがなかった。

どっじゅ！ ずじゅううっ！

「あっひ！ ふひあっ！ あっあっ——んひいいいっ!!」

背後から魔王を刺し貫く。ブヂブヂブヂッと一気に処女膜を突き破り、子宮口に届く程奥にまで肉棒を挿し込んだ。

「あああ……これ……あっあっあっ!! は……挿入ってる。余……余の中に……これ……んんん！ ち……ちんぽが……あああ……ちんぽが挿入っているのかあ!!」

「はい。挿入っていますよ」

痛々しい程に膣口を拡張しつつ、素直に首を縦に振った。

「どうですか？ 痛くはありませんか？」

グリグリと腰をひねり、子宮口を圧迫する様に刺激しながら問う。

「あつく……んぐううう！ これ……裂ける。余の……おおお！ 身体が……裂けてしま  
いそうじゃ！ ちんぽ……大きすぎる！ 息まで……つまるうう！ じゃが……じゃがあ  
あああっ!!」

肢体を戦慄かせ、シーツをギュッと握る。流石に魔王といえど破瓜は辛そうだ。だが、ルーシエが感じているものは辛さや痛みだけではない。

「これ……い、痛い。確かに痛い……それ以上に……はおおお……き……気持ち……い  
いっ！ また……んひいいい！ またイッてしまいうう程……余は……はっふ……んふあ

あああ！ か……感じておるうう♥」

はつきりと性感を口にしてきた。

同時にギュウウウツと肉棒を強く締めつけてくる。今にも食い千切りそうな程の力だ。まるで全身で快感を訴えてきている様にも感じさせる程の反応だった。

これだけの反応を見せてくれている。自分で感じてくれている。それだけで感無量な気分になる。

「そうですか。ですが……もつとですよね？ もつと気持ち良くなりたいですよね？」

だが、まだ足りない。もつとだ。もつと！ もつと刻みたい。この幼い身体に快感を！！

「ああ……なりたい。気持ち良く……。じゃから……感じさせよ。余を……もつと！」

「はい！ ですから……行きますよルーシエ様。もつと奥まで。貴女にとつて最も大事なところまで、しっかりと犯してあげますよ」

「最も……だ……いじな……ところ？」

わけが分からぬといった様子で首を傾げる。

「こういうことです」

問いかげには言葉ではなく行動で応える——とでもいう様に、ステーションは更に腰を突き出した。

どっじゅ！ ずじゅつぽ！ どじゅううつ！！

「おっひ！ おおおおっ！ なんじゃ？ なんじゃこれ!? おっおっおっおっ——ふほお

「おおおおおっ!!」

子宮口に触れていた肉棒を更に奥へと進める。膣奥にキスをするだけでは満足できないとてもいう様に、子宮口を押し開くと、その中にまで亀頭を侵入させていった。

「挿入ってくる! なんじゃ? これ……どこに? どこに挿入っておるう!!」

「子宮です。これはルーシエ様の子宮。私は……貴女の子宮まで犯しているんですよ」

「子宮? なんじゃ? なんじゃそれ!? 知らぬ! そんなの余は……知らぬぞお」

「でも……気持ちいいでしょう?」

子宮についての知識の有無などどうでもいい。大切なのは感じているかどうかだ。

「お……おおお! それは……ああ……その……ふっほ! んほおおお! その通りじや!! か……んじてる! 余は……ふひいいい! 子宮! 主が……ああ……あしゆたろとがいう子宮とやらをおかしやれて……んっひ! ふひいいい! かん……じて……おりゅううう!」

何度も首を縦に振り、魔王は快感を認めてくれた。愛撫のお陰——それもあるのだろうが、どうやらルーシエの身体は元々敏感な方らしい。

「それは嬉しい返事です。ならば……もつと頑張らねばなりませんね。行きますよ。魔王ルーシエさま」

もちろん挿入だけで終わるつもりはない。

ずっじゅ! どじゅううっ! ずっじゅぼ! どっじゅ! どじゅっどじゅっどじゅっ

どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ!!

「はっひ！ んひいいい！ おっおっおっおっ——おんんんんっ♥ こ……………れ……………うご！ あっひ……………ふひいいい！ うご……………き……………だした！ あああ……………ちんぼ……………余の中で……………動き……………始めたああ♥ おんっおんっ——おんんんんっ♥」

ピストン運動を開始する。パンパンに膨れ上がった肉槍で、子宮内部を突く。子宮壁に肉先を叩き付けた。

小柄な身体がピストンに合わせて揺れる。溢れ出す汗が周囲に飛び散った。小さな膨らみかけの胸が控えめだけれど上下に揺れる。そうした姿もまた魅力的だった。

「ほひいいい！ ズンズンって！ 奥……………ズンズンって……………ちんぼが！ ふひおおお！ ちんぼが叩いてくるうう♥ おおおお！ これ……………潰れる！ 余の……………ふひいいい！ 余の身体が……………ちゅぶれてしまいそうじゃああ！」

ルーシエの小柄な身体に対し、ステーションアの肉棒はあまりにも巨大なものだった。結果、突き込みに合わせて下腹部が内側からボコッと膨れ上がる。身体が潰れてしまうとルーシエが口にするのも仕方がないといった有様だった。痛々しささえ感じさせる程である。

だが、ルーシエが感じているのは苦しみではない。カリ首で子宮口を引き摺り出す様に引っ張るたび、今にも子宮壁を貫きそうな程の勢いで肉槍を突き込むたび——

「ほひいいい！ こんなの……………ああおおお！ 良すぎる！ よ……………すぎて！ んほおおお！ が、我慢できない！ また……………またすぐにいっでしまう！ また……………まりやああああ♥」

ルーシエは狂った様によがってくれた。

「いっひ！ ちんぼ……ちんぼでま〇こ……子宮……ズンズンされるの……最高じゃあああ！ おっひ……ふひいっ♡」

ただ喘ぐだけではない。多分無意識のうちになのだろうけれど、腰を振るなどという行為も行ってくれる。こちらの動きに合わせる様に、肢体を淫らにくねらせてくれた。こんな姿を見せつけられて我慢などできるはずがない。

「くううう！ これ……出ます！ 我慢なんかできません！」

「で……出る？ なんじゃ!! できなくて……どうということじゃあ!!」

「簡単なことです。私もイクということですよ。ですからルーシエ様……一緒に……一緒にイキましよう。私と共に」

囁く様に絶頂を呼びかける。

「あ……ああつ！ イクっ!! おおお……イクぞ！ 余もイク!! 一緒……あしゆたろとと一緒にいい♡」

幾度となくルーシエは首を縦に振った。

「イカせよ。余を……イカせるのじゃあ♡」

もちろん、ただ感じるだけじゃない。やはり命令を下してくる。流星は魔王……。

その命にステーションは従う。従う以外の選択肢など存在しない。この様な姿を見て性感を抑え込むことなどできるはずがないから……。





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫  
S.E.N. コスプレ

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル！

フリリダム120%!?  
ジャンルにこだわらない  
ドキドキラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

あの人気作品の  
外伝作品もあり！  
電子書籍しつこめなエッチノベル！

姫騎士 クラズメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト  
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

ドキドキラブな  
ハーレム系  
ライトノベル！